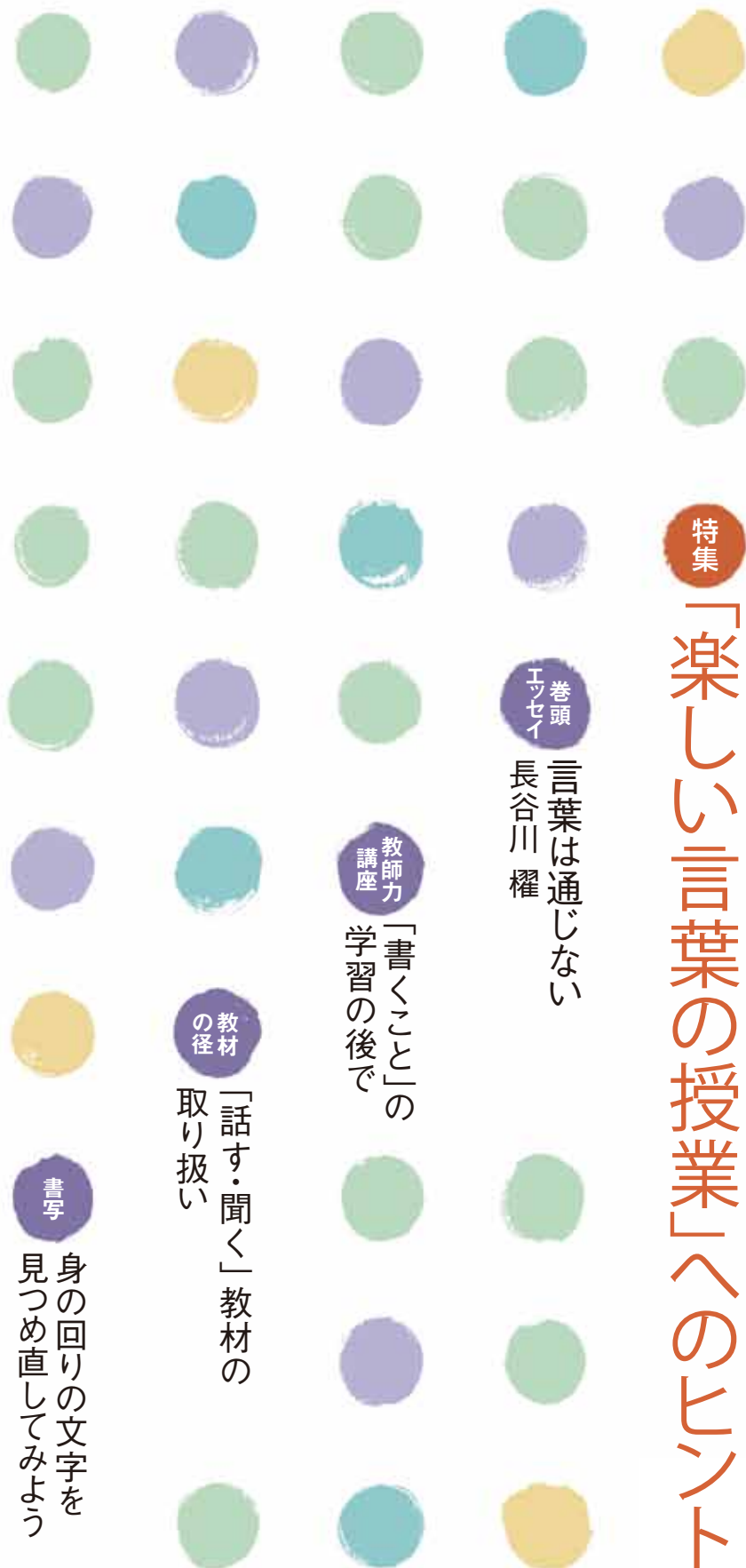




特集 「楽しい言葉の授業」へのヒント

巻頭
エッセイ
言葉は通じない
長谷川 耀

教師力
講座
「書くこと」の
学習の後で

教材
の経
「話す・聞く」教材の
取り扱い

書写
身の回りの文字を
見つめ直してみよう

藤原和博 編著



未来を生き抜くための「柔らかいアタマ」をつくろう!!

200字意見文 トレーニング



杉並区立和田中学校で実践された「200字意見文」。はじめは30分使っても書けなかった生徒が、繰り返すうちに、だんだん書けるようになってくる。半年を過ぎて、15～20回目を超える頃には、10分以内にできて時間を持て余す生徒も現れる。そうなるとう、国語科の時間でなくても実践可能だ。本書は、小学校高学年でも取り組める課題を含んでいる。学校でも家庭でも取り組んでみてほしい。(本書p14～15より)



藤原流
200字意見文
トレーニング
藤原和博 編著
ISBN978-4-89528-473-8
定価 1680円(本体1600円) 本文112p B5判

↓ すぐに使えるワークシート付き
↓ 小学校高学年～中学生対応

光村図書

中学校 国語教育相談室 通巻No.135 2010(平成22)年9月3日発行 定価126円(税込)
発行人=常田 寛 発行所=光村図書出版株式会社 東京都品川区上大崎2-19-9 〒141-8675 電話 03-3493-2111
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> E-mail:koho@mitsumura-tosho.co.jp
印刷所=村田印刷工業株式会社 デザイン=mint grafix

個人情報の取り扱いに関しては、弊社「個人情報保護方針」に則り、適切な管理・保護に努めてまいります。くわしくは、光村図書ホームページ「光村チャンネル」をご覧ください。
<http://www.mitsumura-tosho.co.jp> 広報誌の配送停止をご希望の方は、光村図書広報部までご連絡ください。

探検！言葉の森 11

巻頭エッセイ
言葉と向き合う

特集 04 「楽しい言葉の授業」へのヒント

【文法編】文法教育の難所越え

教材の径 10 16 「話す・聞く」教材の取り扱い 松野洋人

23 「図書館を利用した“調べ学習”のしかた」中級編

一 赤木かん子

とは何だろう。ここで参考になるのが「〜から」と「〜ので」の違いだ。「ので」にあるのはやわらかさだ。例えば、言い訳をする場合、「事故があったから遅れました」よりも「事故があったので遅れました」の方がやわらかい。特に自分の事情を言うような場合、「だから」では理が前面に出すぎる。その点、「なので」は、「〜なのだ」のように事情をまとめる形と「〜で」という少し曖昧に続く形とから成り立つ点でややほんわかと理由を表せる。この接続詞にもそれなりの持ち味はありそうなのだ（「それで」などとの相違点の検討も必要だが）。

なので、「なので」はこれからも残っていくのではないだろうか。

言葉は 通じない

俳人 長谷川 權はせがわ けん

中学校の三年間、同じ先生に国語を習った。その授業で宮沢賢治の詩や若山牧水の短歌を知り、「言葉っておもしろいなあ」と思った。大学は法学部だったが、卒業すると新聞社に就職した。その新聞社もいつかやめて、気がついてみると、俳人になっていた。不思議なことに中学の国語の授業で「言葉はおもしろい」と思った、その思いのまま今まで言葉とかわってきたような気がする。教師の感化力はかくも偉大。

俳句は十代から見よう見まねで作ってきたが、あるとき（新米の新聞記者時代だったか）、言葉には意味のほかに風味というものがあることに気づいた。たとえば、「さくら」という言葉は植物学上の桜をさす。これが「さくら」の意味である。しかし、「さくら」には桜という意味しかないかというと、そんなことはない。人の心をふわりと包んで優しくさせる働きがある。これが「さくら」という言葉の風味というものだ。

新聞も詩歌も言葉を使う。しかし、新聞記事は言葉の意味を駆使するが、詩歌は言葉の風味を大事にする。ところが、多くの人は俳句の意味がわかっただけでその句がわかったと思ってしまう。

さまざまの事おもひ出す桜かな 芭蕉

この句の意味はと問われるなら、桜の花を見ているといろんなことを思い出すということである。しかし、この意味がこの句のすべてではない。言葉の意味は俳句の出发点でしかない。ここからはじまる風味の世界は頭でなく心で味わう。それは意味のように一通りのものではない。

く、人によって、さらにその人の人生経験によって変幻するだろう。

「さくら」の風味の部分、人の心をふわりと包んで華やかにするもの。日本人は昔からこの部分をとりたてて「花」と呼んできた。たしかに学校では「古典文学で花といえば桜のこと」と教える。しかし、桜と花は違う。違うからこそ別の言葉がある。人の心を華やかにする花、その最たるものが桜なのだ。

それから何年かたって、俳句は言葉だけでできていないということに気づいた。たしかに俳句は言葉でできている。しかし、言葉だけでできているのではない。

一月の川 一月の谷の中 飯田龍太

この句の言葉が描いているのは一月の川が一月の谷を流れているという、ただそれだけのこと。そこで何人かの人は「何てつまらん句だ」と思ってしまう。そういう人はこの句のまわりに広がっている

真白な余白に気づかないのだ。

俳句、とくに名句の場合、言葉より言葉のまわりに広がる余白こそが大事である。むしろ言葉は余白を引き立たせるためにある。ということは、俳句を鑑賞するときは言葉だけに気をとられてはいけないということだ。その句の言葉がどのような余白を作り、どのようにして一句の中に抱えこんでいるか。いつもこのことを忘れてはならない。

さらに何年かたって、言葉とは通じないものだとつくづく思った。外国語の話ではない。同じ言葉を話す者同士のことだ。

たしかに言葉は互いに気持ちを伝えるためにある。そこで言葉を使えば互いの気持ちに通じるはずと思ってしまふ。「だから黙っていないで、もっとみんなと話そうよ」ということになる。

その昔、就寝中、テロリストに襲われたある首相は銃口を向けられながら「話

せばわかる」といった。非情にも次の瞬間、銃弾が発射されたので首相とテロリストはついに話し合うことはなかったのだが、ほんとうに話せばわかるのだろうか。

あたりを見回してみると、外交問題から夫婦喧嘩にいたるまで世の中のもめごとのほとんどは言葉が原因である。言葉を尽くして話してもわからないどころか、言葉によって誤解を招くことさえある。

それなら言葉を使えば互いの気持ちが通じるなどと安易に信用せず、言葉とは通じにくいものだど覚悟するほうがいい。

長谷川 權はせがわ けん

1954年、熊本県生まれ。俳句結社「古志」主宰、朝日俳壇選者、季語と歳時記の会代表。東京大学法学部卒業後、読売新聞記者を経て俳句に専念。サントリー学芸賞、読売文学賞を受賞。2004年から『読売新聞』に詩歌コラム「四季」を毎日連載。著書に『長谷川権全句集』『古池に蛙は飛びこんだか』『俳句的生活』『和の思想』などがある。



そうすると、そんなに通じにくいのなら使い方に気をつけなくてはいけないということに気づき、次には使い方を自分で工夫するようになる。いい加減に話したり書いたりメールを打ったりするのをやめて、言葉についてもっと勉強しよう、書き方や話し方の練習もしようということになるはずだ。これが言葉の学習の原点だろう。

外国語であれば初めから通じないと警戒してかかるから、それが当たり前のことなのだが、母国語の日本語となると、とたんに当たり前でなくなる。子どものころから使っているのだから、通じないはずがないと誰でも思っている。だから言葉で失敗する。

演説や小説のように多くの言葉を費やしてもなかなか通じないのだから、短い俳句はなおさら通じない。だからこそ方が一、通じたときは何にも増してうれしい。これが俳句の喜びというものだ。

特集

「楽しい言葉の授業」へのヒント

京都教育大学教授 森山卓郎

もり やま たく ろう
森山卓郎

1960年京都府生まれ。大阪大学文学部助手、講師、京都教育大学助教授を経て、現職。専攻は日本語文法。日本語の奥にあるものとの見え方や、日本語でのコミュニケーションのあり方などを研究。著書に、『国語教育の新常識—これだけは教えたい国語力—』（共著・明治図書）、『コミュニケーションの日本語』（岩波書店）、『表現を味わうための日本語文法』（岩波書店）など多数。

学習指導要領が新しくなって、「言語事項」は「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」となりました。

「ア 伝統的な言語文化に関する事項」という事項が加わったわけですが、「言葉」の特徴やきまりに関する事項の重要性はますます高まっています。「言葉」そのものに対する理解は、新たに位置づけられた「伝統的な言語文化」はもちろん、あらゆる国語科の学習の基本となっているからです。

とりわけ、「言語活動の充実」というこ

とが強調されるようになってきているにもかかわらず、語彙力の不足、不十分な構文能力などが大きな問題となっています。この背景には、言葉と触れる絶対的な機会が少なくなっていることもあるのではないのでしょうか。ちょっとした小話、小さなゲームも大切な学力の基礎となるのではないかと思います。いろいろな機会に、言葉のおもしろさ、奥深さ、（そして、怖さにも）触れさせていくことが必要でしょう。

今特集では、敬語編、語彙・文字編、文法編、というように三つのトピックに分

敬語編

すっきり整理、疑問も解消

【新しい分類】

これまで一般的だった「尊敬・謙譲・丁寧」という三分類に対して、平成十九年度文化審議会答申「敬語の指針」では、五分

類が提案されました。五分類という考え方が出てきた背景には、敬語に関する研究の進展があります。「尊敬」は「上げる」ことによる敬意、「謙譲」は「下げる」ことによる敬意、という考え方だったのですが、「丁寧語」の存在

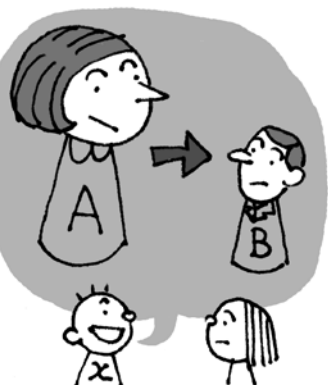
を指摘する宮地裕博士の研究などで、敬語表現にはもう少し複雑なものがあることがわかってきたのです。

それではまず、三分類からおさらいしてみしましょう。

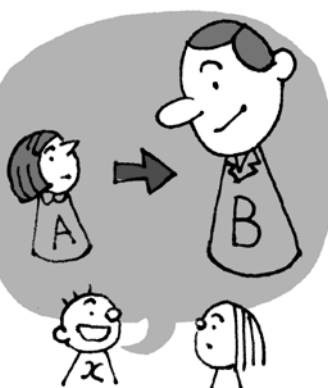
例えば、Xさんが、「Aという人物がBという人物に会う」ということを、聞き手に伝えるとします。さまざまな敬意の関係によって、表現はさまざまに変わります。例えば、

AさんがBにお会いになる。

たとえば、主語の「Aさん」が高く待遇されることになります。「お会いになる」のように主語を高めたり、「Aさんのお車」のように持ち主を高めるのが**尊敬語**です。主に元の動詞に「お〜になる」「られる」



AさんがBにお会いになる。



AがBさんにお会いする。

※大きく描かれた人物は、話し手が立てようとする人物を示す。

「お目にかかる」（「会う」の謙譲語）などの特別な言葉もあります。尊敬語も謙譲語も話題に登場する人物に対する敬語で、例えば独り言の中でも言うことができます（話題の登場人物への敬語なので**素材敬語**と呼ばれることもあります）。丁寧語は言うまでもなく、聞き手に対する敬語で、「です、ます、でございます」

を付けて表現しますが、個別の語もあります。「ご覧になる」「見る」「召し上がる」「食べる」「飲む」などです。おもしろいことに、例えば「いらつしやる」は、「行く」の尊敬語であると同時に、「来る」の尊敬語でもあります。例えば、「明日、先生がいらつしやる」という文を聞けば、「行くのか、来るのか、いるのか」という三通りの意味を考えないといけません。

一方、**謙譲語**の場合、

AがBさんにお会いする。

というように、動きの相手である「Bさん」が高く待遇されることになります。このBさんはAさんよりも高められています。同時に話し手よりも高い扱いになっています。

「お目にかかる」（「会う」の謙譲語）などの特別な言葉もあります。

特集

「楽しい言葉の授業」へのヒント

などです。これは独り言では使えず、聞き手への敬語です(対者敬語と呼ばれることもあります)。国語科の学習では最も早くから学習する敬語で、丁寧な言葉遣いの基本です。

丁寧語を使った文体を「敬体」、そうでない文体を「常体」と呼ぶこともあります。「会います」のように元の動詞に「ます」をそのままくっつけたり、名詞や形容詞などに「です」をつけたりします。

丁寧語は尊敬語や謙譲語と一緒に使われることもあります。それぞれ「AさんがBにお会いになります」「AがBさんにお会いします」のようになります。

この三分類に加えて、美化語、丁寧語(「謙譲語Ⅱ」とも)という敬語形式も含めた分類が五分類です。

美化語とは、言葉を美しく言うという機能だけがある表現で、

おふろに入ってから、お茶を飲む。

の「おふろ」や「お茶」のような表現です。光村図書の中学校の教科書では以前から取り上げられています(三年P32)。同じ「お」でも「Aさんのお車」というときには、相手の持ち物を高めて表現する尊

敬語となるのに対して、「おふろ」「お茶」は誰を尊敬しているのでもありません。「ふろ」「茶」と言えばやや乱暴に聞こえるのを「お」をつけてきれいな言葉遣いとして言っているのです。

きれいな言葉遣いということはすべての敬語に共通するのですが、いわばその特徴だけを持つてるのが美化語だといえます。

丁寧語(謙譲語Ⅱ)とは、丁寧語と一緒に使われ、聞き手に対する敬意を表すものです。例えば、

私たちが連絡いたします。

などの「いたす」の部分がこれに当たります。基本的に「ます」と一緒に使われることに注意してください。

存じます(存ずる) 申します(申す) 参ります(参る) おります(おる) などそうです。

この丁寧語の注意点は、主語が一段下げた言い方になるということです。

お客様がいたしますか。

のように言う「お客様」を立てた表現にはならないので注意が必要です。「弊社」などもここに分類されます。

Q「寒くない」の丁寧語には「寒くありません」と「寒くないです」の二つがある?

Aどちらも正しい表現とされています。ただ、形容詞はもと「です」がつきにくいという背景があります。「寒いです」の「です」は「本です」の「です」とは働きが違うからです。

これは「です」を「だ」に変えてみるとわかります。「本です」は「本だ」になりますが、「寒いです」は「寒いだ」にはなりません。「寒いです」の「です」には丁寧にするという働きがなく、断定的意味はないのです。しかし、現在では、ほかに言いようもないので(「寒うございます」だと丁寧すぎます)、「寒いです」という表現は普通に使われています。

五分類		語例		三分類
尊敬語	お(ご)になる、～なさる、～られる、お(ご) + 名詞			尊敬語
謙譲語Ⅰ	お(ご)する、～申し上げる、～うかがう など			謙譲語
謙譲語Ⅱ(丁寧語)	いたす、存ずる、申す、おる など(「ます」と一緒に使う)			謙譲語
丁寧語	です、ます、でございます			丁寧語
美化語	お + 名詞			丁寧語

※美化語を三分類の丁寧語に含めない考え方もある。

■五種類の敬語を使った文

先生が大先生に
美化語 尊敬語 謙譲語 尊敬語 謙譲語 丁寧語 丁寧語
お茶と 著書を 差し上げ られたと うかがって おり ます。

なお、専門的にはこの丁寧語という呼び方が普通ですが、従来は謙譲語に入っていましたので、「敬語の指針」では、「謙譲語Ⅱ(丁寧語)」と呼んでいます。聞き手に対する敬意を表す「謙譲語Ⅱ」に対して、話題の登場人物間の待遇を表す従来の謙譲語は「謙譲語Ⅰ」と呼ばれます。

敬語Q&Aコーナー

Q 過剰敬語(二重敬語)とは?

A 「先生がお話しになられる」のような形です。「先生がお話しになる」に、さらに「られる」をつけた形になっています。

ただし、実際の受け取り方は少し違うようで、気にならない、という人もいます。

なお、「研究している」に対して、「研究なさっていらっしゃる」は、「研究する」「ている」のそれぞれが敬語になった形なので、少し重複感があるかもしれませんが、二重敬語ではありません。ちなみに、「研究なさっている」という「動詞(尊敬語) + ている」と、「研究していらっしゃる」という「動詞 + いる(尊敬語)」という表現の両方がありますが、どちらも可能です(前者のほうがよく使われているようです)。

る言葉だと考えられています。

ただ、現代語では、いずれも「お」の結びつきは強く、「お」を取り去った「なら」「もちゃ」では、意味をなしません。その点で、「おなら」の「お」や「おもちゃ」の「お」は、もはや敬語表現としての働きを付加しているというより、語の一部になってしまっていると言ったほうが適切です。

チャレンジコーナー

だれを高めた表現かな?



特集

「楽しい言葉の授業」へのヒント

漢字を 楽しもう

「春日はなぜ「カスガ」？」

漢字の訓読みとは日本語の「意味」による読み方です。訓読みには、熟字訓と言われるような、語としてまとまった特別な読み方のものもあります。例えば「土筆」は土から生えたところが筆のように見える植物です。それで「土筆」という漢字をあてますが、言葉はそのまま「つくし」と読むのです。「くらげ」を「海月」や「水母」と書くのも同様です。こうした例はクイズでもよく取り上げられています。

「時計」も「とけい」と読むのは熟字訓で、「計」は「けい」という音読みを持っていますが、「時」そのものは「と」とは読みません。意味がぴったりなので気づきにいいのですが、もとは「土圭」などと書いた言葉の熟字訓で、いわば漢字が入れ替わっているのです。「時計」を「とけい」と読むと教えられて、「じけい」と読

まないのはなぜか、何かしっくりこなかった、という子どもたちもあるかもしれません。その感覚は正しいと言えます。

さて、中には変わった背景をもった熟字訓もあります。例えば、「春日」は、「はるひ」が「かすか」にかかる枕詞ということからできた読み方とされています。春日はかすんでかすかになるからでしょうか。「春日」を「かすが」と読むところに、ちよつとした趣を感じます。「飛鳥」も同様。「飛ぶ鳥の」が「明日香（あすか）」という地名にかかる枕詞で、そこから「飛鳥」を「あすか」と読むようになっていったのです。

もともと古い日本語には字はありませんでした。日本語という言葉と漢字とのつきあい方にはいろいろな背景があり、それをたどることも楽しい学習になるかもしれません。



せん。

このような熟字訓、生徒たちに身近なものとして、次のような例があります。ゲーム感覚で楽しむことも、言葉や表記に対する意識を高めることにつながります。

【例】案山子、神楽、胡桃、木霊、河童、秋刀魚、松明、足袋、心太、土竜、浴衣、行方

「広く使われているけれど、 本来は「漢」違い？」

当たり前のことですが、「手へん」と「土へん」は違います。例えば「掘る」は前者、掘ってできた「堀」は後者です。しかし、「手へん」と「土へん」の混同が広く使われているということもあります。その例が「独壇場」。「投手交代で彼が投げられるようになってからは、すっかり彼の独壇場で、たちまちゲームを制した」のように、「ある人が思いのままに活躍する」ということを表す言葉です。しかし、これは本来は「独擅場」。「ほしいます」という「擅」がよく使われる「壇」に勘違いされたのです。一人で壇の上上がっている、というような解釈もできそうだからかもしれませんが、伝統的な言葉の使い方から考え

れば間違った取り違えですが、広く使われているようです。

「事物をしっかり完成させるための最後の仕上げ」を表す「画竜点睛」も「画竜点睛」と書く人があります。「睛」は「ひとみ」ですが、「睛」という字に似ているからでしょう。これも伝統的な言葉の使い方からすれば間違いですが、常用漢字に「睛」がないこともあって、広く使われてしまっている表記といえます。

「雰囲気」は「ふいんき」か 「ふんいき」か？」

言葉の勘違いという点では、音の入れ替わりもあります。例えば、「山茶花」は「さざんか」と読みますが、本来は「さんざか」です。ちょうど漢字の音読みを対応させていくようになります。しかし、音の転倒で「さんざか」が「さざんか」になったのです。歌にも出てくる言葉ですが、むしろ現代では「さざんか」が普通の言い方です。

音の転倒という例では、「新た」と「新しい」もそうです。「新」は「あたらし」が本来の言葉ですが、これが「あたらし」になったものです。「あたらし」は本来は

「惜しい」という意味でした。

「雰囲気」を「ふいんき」と言っている人をとどこぎ見受けますが、これは現在、まだ誤りの意識がある例ではないでしょうか。ただ、これから何十年か経つと、「ふいんき」の方が市民権をもつかもしれません。言葉の歴史にはいろいろな勘違いもあります。

「何」をなんと読む？」

「何」という字ですが、「なに」とも「なん」とも読むことがあります。「何と言うの」というとき、「なに」でも「なん」でも間違いではありません。しかし、「何時」「何円」「何軒」などという場合、「なに」と読むのは間違いです。数字が入る場合には「なん」としか読めないようです。例えば「何人」は「なに」と読むのか「なん」と読むのかで、意味が違います。「なにじん」だと国を聞くことになりすが、「なんにん」だと人数を聞くことになるからです。

このほか、「何てこった！」では「なん」、「何者だ」では「なに」というように、語による読み方の慣用的な違いもあります。

チャレンジコーナー

すきまの時間などに、漢字のゲームをしてみよう。辞典を使って、知らない言葉や漢字と出会わせるのもいいですね。

どれだけ続けられるかな？

① 同じ読みを持つ漢字（漢語）を集めようゲーム

【かい】 界会回海解貝怪快戒壊…
【せん】 線千戦選船織泉銭先専…
【こうかん】 交換、高官、銅管、交歓、好感、向寒、公館、交感、校勘…
【せんこう】 選考、専攻、線香、潜行、閃光、専行、先攻、選鉱、戦功…

② 漢字しりとりゲーム

漢語しりとりゲーム
・留学→学習→習字→字体→体育→……
・入館制限→制限時間→時間短縮→……

③ 熟語クロスワードパズル

書籍や雑誌などの例を参考にしながら、クラスの実態に合わせて作ってみてください。作る楽しさ（苦しさ?）も味わえますよ。

文法教育の難所越え

「体言」と「用言」がわかると
文法がわかりやすくなる

「名詞」「動詞」などの言葉に比べ、「体言」「用言」という言葉は意味がわかりにくいのではないだろうか。個人的な話で恐縮ですが、私が中学生のとき「体言」と「用言」という言葉がよく理解できませんでした。

これには背景もあります。「名詞」「動詞」などの用語は西洋の文法を翻訳してきた用語です。英語などの外国語を学ぶ場合などに「名詞」「動詞」という言葉はよく耳にします。一方、「体言」「用言」は古くからの日本の言葉です。華道などでも「体」「用」のような言葉が使われることもあり触れない言葉です。

しかし、「体言」「用言」は、主語にな

るか述語になるかという考え方ですから、文の構造にも関わっています。

また、当然、体言、用言、それ以外の言葉、というようにまとめていくと、これは品詞の理解にも役立ちます。さらに、「連体形」「連用形」という形があるように、「体言」「用言」ということは、活用形の学習にも関連しています。このように、体言と用言という概念が理解できれば、学習の大きなポイントが理解できるようになるのです。

では具体的に見ていきましょう。
まず、体言とは名詞のこと。主語になれる言葉として特別扱いされています。形の上では「が」「の」という形になるなら体言、すなわち名詞だと一応言えます。主語になるだけでなく、助動詞の「だ」「です」をくっつけると、名詞も述語になります。用言とはそれだけで述語になれる言葉のことです。品詞としては三つの種類があります。簡単にまとめると次のようになります。

■動詞

歩く、走る、する、着る、消える…

言い終わりは「ウ」段の音。

■形容詞

白い、明るい、楽しい…

言い終わりは「い」。「く」とい

う形にもなる。

■形容動詞

きれいだ、変だ、奇妙だ…

言い終わりは「だ」、次に名詞がくれば「な」となる。

ちなみに、現代語では動詞の言い切りは「ウ」段の音ですが、古典語では違います。例えば「あり」というように終止形がイ段の音のものもあります。

体言と用言とは、主語・述語の関係にかかわる概念です。さらに、ここから連体修飾と連用修飾という関係づけがポイントになります。

●連体修飾

「体言」に「連なる」、つまり名詞を修飾すること。

白い+雪、歩く+人、変な+服装

●連用修飾

「用言」に「連なる」、つまり述語を修飾すること。

さつさと↓歩く、ずいぶん↓歩く、たぶん↓歩く、ごはんを↓食べる

ここでの「修飾」という概念は実は難しいのですが、素朴に、どの言葉に関連しているか、つながっていくか、という関係で考えるとわかりやすいかもしれません。日本語では言葉のつながり方によって形が変

チャレンジコーナー

次は西村府子先生（京都教育大学大学院生・京都市立陶化中学校教諭）の提案例をもとに考えたもので、表現技巧にも関連します。

▼唱歌「とんび」を例にした活用の学習

一、飛べ飛べとんび空高く

鳴け鳴けとんび青空に（以下略）

二、飛ぶ飛ぶとんび空高く

鳴く鳴くとんび青空に（以下略）

この歌詞は、一番では、「飛べ」「鳴け」と命令形になっています。こちらは、生徒たちもすぐに「命令形」であることや文の意味もわかるでしょう。

一番では「飛ぶ」「鳴く」と連体形ないし終止形になっています。この部分の意味と活用について生徒たちに考えさせます。

連体形だと「空高く」の後は省略されていることになり、「飛んでいるとんび」という名詞終わりの表現になります。

終止形だと「空高く」は「飛ぶ」を倒置して修飾する形と考えられるでしょう。

このように、標語、歌、広告「ピー」などの身の回りの表現から文法を考えるのもおもしろいですね。ふだんから気になる表現などメモしておいて、生徒たちと一緒に楽しみください。

★先生を困らせる文法の例外

文法には様々な例外もあるというのが事実です。例えば「同じだ」は「変だ」とよく似ていて形容動詞のようにも見えますが、「同じな」という連体形がなかったり、「同じく」というまるで形容詞のような形があったりします（古くは「同じい」という形もありました）。

活用する（述語でいろいろな使われ方がある）

付属語 助動詞

自立語 動詞（ウ段）
形容詞（い）
形容動詞（だ／な）

用言＝述語になる

活用しない 助詞

名詞（が／の）体言＝主語になる

連体詞＝連体修飾

副詞＝連用修飾

接続詞＝接続関係

感動詞＝独立して使う

「書くこと」の学習の後で

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q

生徒たちに何かを書かせる、その後が大変です。コメントを一人一人に書く時間がかるし、それを考えると、書かせること自体がおっくうになります。
書かせた後の指導はどのようにしたらいいのでしょうか。

A

どうやら子どもたちが書くようになるかということは、とても大切なことですが、書いた後どうするかも同じくらい重要なことです。
作文の処理というと、先生のコメントが一番に思いつきますね。確かに先生のコメントをもらうと、子どもたちは嬉しそうです。また書くという気になるかもしれません。



しかし、何かを書いた後の事後指導がそれだけではもったいないです。労力の割には効果的とはいえません。事後指導をいろいろ工夫することは可能です。
今回は、前号の『書くこと』の学習の前に「の続編として、『書くこと』の学習の後で取り組んださまざまな例を紹介したいと思います。

子どもたちは友達の文章を読むことが大好き

前回紹介した「ウソ日記」も「言葉の小劇場」も、必ず書いた後にはいくつかの作品を印刷して紹介しています。プリントを配った瞬間の子どもたちの生き生きとした反応には、毎回思わずほほえんでしまいます。

上手な子どもというものはいるもので、〇〇君、またまた登場ということもありますが、コンパクトな学習で文字数もそんなに多くありませんので、たくさん子どもたちが登場できるようにしています。最近元気のない〇〇さんはどうかしら、先日叱られた〇〇君は、などと生活指導的な観点で選ぶときもあります。そういうことができる国語科っていいですね。

書いたものは形として残っている、そのまま学習材として使うことができます。どんな授業をしたときも、子どもの書いたものは学習材になる、というのが長い間実践して

きて得た結論です。書かせっ放しにするなんてとてももったいないこと。何かを教えるときに、子どもたちの生み出したものを材料にすることは有効な方法です。

私の教室では、何か書いたら必ずみんなの目に触れる可能性あり、ということにしています。細かいことですが、そのため、印刷ではつきり出るように、常に濃く書くことを約束事にしていきます。

友達の考えを知る、好みを知る、持っている言葉を知る。そのことによって更に自分の知見も広がり、友達と学び合うことの楽しさを実感する。そういう学習の時間を通して、学びを共有する集団ができあがってくるのだと思います。

「コメントを言う合う」

何かを発信したら必ず返信がある。そういう経験は発信の原動力となります。

次に示したものは、「春に」(二年

「春に」 題を考える

- 1 春にはたくさんすることがある。卒業、入学、クラス替えに新しい出会い。そんなときの気持ち、この詩になっていると思う。いろんな悩みができたり、言いたいことが言えないとか、そんなことがつまっている。
- 2 春という季節はいろんなことがいっぺんに始まり、頭の中がごちゃごちゃになって、自分でもわからない気持ちになるからね。だから、「春に」だよ。
- 3 自分の周りの様子がいろいろ変わったとき、自分の中に芽生えた気持ちがあるのか探ると思うんです。春はいっぺんに様子が変わりますよね。
- 4 春は様々な思いが渦巻くものだ。
- 5 大地のいろんな所から感じる新しいエネルギーがまさに、いろんな出会いの春にぴったりだと思っ。

■コメント例

- ・1番の〇〇さんの意見について言います。
クラス替え、新しい出会いというところがホントだ！って思ったし、何か言葉にならない季節だね、と思いました。
- ・5番の〇〇さんの文の中に、「大地のいろんな所から感じる新しいエネルギー」という言葉があるんですけど、カッコイイ表現だになって思いました。



人、手を挙げて」
と云うと、どの考

と云つと、どの考
えにもたくさんの子
どもたちが手を挙げま
す。書いた本人は少し照
れくさそうにしていますが、
書いてよかったなと思つたことで
しめしめ。

このようにコメントを言い合うのもいいですし、時間がないときは心に留まったところに線を引かせるだけでも「返信」はできます。コメントを言わなくていいので短い時間でできるでしょう。どこに線を引いたかだけを発表させても、いい雰囲気になります。

コメントを書く

次に示したものは、二百字の作文で「私はひと言で言つと○○な子どもでした」という題の作品です。最初に定義付けをして、その具体例を述べていく学習です。その作文を書いて文集にし、「コメントを書き合う」学

習をしました。自己紹介のバリエーションとして、一年の一学期にやったものです。

私は可能な限り、こうした文集づくりを心がけています。形になって残ることで、学習材として使えますし、コメントを書き合う学習が可能になるからです。

コメントは、今の友達ではなく、昔の友達の様子に対して書くので、あまり遠慮せず書けるようです。受け取る方も、楽くなるような温かい雰囲気になりました。

【生徒の作文例】

僕は、ひと言で言うと思議な子どもでした。

僕は、ひまで、やることがないとなぜか、いつも何も持たずに散歩に出るのです。何となく、いつも散歩をするのです。長いときは、二時間半も歩いたことがあります。行き先を考えずに、ただ歩くのです。周りの景色や音を楽しみながら。ときには、公園のベンチで休息をして。僕はこんな感じで、散歩を楽しんでいました。

講評する力をつける

私は、どんな単元でも、最後は必ず「まとめ」の時間を設定して、講評の時間をとっています。そのとき使うのが子どもたちの書いたものです。あるときは文章の最後に書いた「あとがき」だったり、授業記録だったり、コメント集だったり、作品集だったりします。つけたい力が何だったのかを確認しながら、学習の振り返りの材料になる文章を使います。

この「まとめ」の時間は単元の仕上げとしても重要であり、子どもたちは実際に自分たちが書いたことに対する講評なので真剣に聞いています。だからこそ、いいかげんなことは言えません。講評するということとは、講評するための観点をしっかりと持っていなければならないということなのです。観点とは、どんな力をつけるためにこの単元をやってきたのかということ。そのことを常に意識していることが求められます。

よい講評をするためには、まず、

子どもの書いたもののいい点を見つけて、言葉で表現できる力をつけることが重要です。どんな文章を見る時も、いい点はどこかなと考えながら読む習慣をつけるといいですね。たとえば次のようなポイントがあります。

- ・字がきれいでいい
- ・こんな漢字や言葉を使っているのがすばらしい
- ・目の付けどころがいい
- ・書き出しがいい
- ・楽しんで書いているところがいい
- ・テーマにぴったり
- ・ここまで深く登場人物の心情を読み取れている

「いいねえ、すごいね、うまいねえらいね」などといった漠然とした言葉ではなく、もっと具体的に指摘できることが重要です。中学生ともなれば、ほめられている言葉に説得力があるかどうか、すぐに気づくものです。

ほめる言葉が豊かに出てくること

【コメント例】

だれの作文に対するコメントか名前を書く

今て同じでおもしろかつたんですね。
悔しい長持は大切だね。こればかりもがんばってわ
けがをしてもあそぶくらいスギ、たったんたね。
今て同じでフワッしてたんたね。秘田のいい所
私もあそぶのが大好きです。
私もこめがりで、すぐ泣き虫です。その長持ち分ります。
今は全助さん仕事しなす、おれにぬ。
おすい体験をしていてさ、こねよくつぎまねをね。
ふすこし、うりていさ又でもクリリ、今はいかえらぬ、
いすもしくりていさや、おれさん今こそあそぶんね。
本当にケーク強いですね。

いまでも、うふん自分でミロ、たこても笑、てる!!
 バレー知、てもうまいと思、つ!! バレーバカ、(笑)
 市伊儀のコトが、もしらな、た、たろ、(初)しりじ、た、
 も、ち、とだけし、かりした、ほ、知、いい、も、...。
 も、と、あ、とな、い、み、か、と、思、て、た、な、...。
 二、ん、だ、な、つ、の、家、に、バ、ー、ー、人、形、な、く、て、や、る、よ、!! (笑)
 お酒は、20、さ、から、で、す、!! (笑) ヲ、ジ、で、な、!!
 と、ても、コ、ー、キ、だ、な、オ、!! (笑) その、運、あ、け、て、す、(笑)
 自、分、で、ミ、ロ、つ、て、る、ほ、ど、さ、あ、ま、り、と、な、く、な、い、と、思、つ、て、う、ち、の、
 ち、の、お、す、た、な、み、ど、い、ち、能、か、ど、い、の、は、本、家、で、な、よ、。
 あ、る、い、れ、カ、ッ、コ、ヨ、ッ、(笑) っ、な、バ、カ、な、だ、け、? (笑)
 も、と、お、ち、つ、二、つ、!! (親)を、こ、は、ら、せ、た、ら、か、メ、ト、

で、教師として欠かせないことはいでしょうか。すぐに上手になるのではありません。常に子どもたの書いたものを講評する場を設定

して、挑戦し続けることが大切です。左にあげた俳句の鑑賞文は、子どもが書いたものです。あなたならどんなふうに講評しますか。

正岡子規

いくたびも雪の深さを尋ねけり

正岡子規

子規は當時、不安と悲しみで胸がいっぱいだ。たに達しない。俳句に感情の言葉が書かれていないのが確実に伝わっている。また、そこがこの作品の魅力でもある。この俳句のいくたびも雪の架さを尋ねけりという所はまるで自分の命の長さを尋ねているようだ。

た。た一行の文が表現するその風景には、子規の悲しみがいっぱい詰まっている。あずかな言葉の中に子規の万感の思いが込められてい

【私の講評例】

鑑賞文らしい作品ができました。「作品のよさ」を表現する、という目標がしっかり達成できていますね。

まずは書きだしがキリリとしていて、かついいですね。「〜に違いない」という表現が緊張感を生み出しています。解説を読んで理解したこと話し合いで出てきたことが上手に文章の中に組み込まれています。またそれに対する自分の思いも「まるで〜のようだ」という表現で巧みに入れています。最後の「万感の思い」が全体を引き締めていますよ。

「話す・聞く」教材の取り扱い

1 はじめに

本シリーズは今回で十回を数えますが、今回はこれまで取り上げたことのない「話すこと・聞くこと」領域の教材を取り上げることにしました。「話す・聞く」学習には、「書く」学習や「読む」学習と大きく異なる性質があります。

その一つは、「話す（表現）」と「聞く（理解）」とが原則同時に展開するということです。それがどういう意味をもつかというと、学習の場において言葉をやりとりする人間同士の関係が好ましい状態に維持されていないと、この種の学習は成立が困難だということです。

山梨学院短期大学教授
松野洋人

もう一つは、音声は発すればすぐ消える（二過性）ということです。この性質を、学習の場においてどのように克服するのか、とりわけ評価場面においては工夫が必要になります。

と「話し合い・討論」と、二つの系統で構成されています。そして、各学年にそれぞれ一教材ずつ配置されています。

標題の教材（三学年）は後者の系統に属するもので、「パネル・ディスカッション」形式で話し合いを行うというものです。因みに、一学年には「グループ・ディスカッション」、二学年には「プレゼンテーション」が位置付けられており、本教材は、「話し合い・討論」学習の、中学校における総仕上げということが出来ますし、広く「話す・聞く」学習の集大成という性格をも有しています。

2 「話し合って考えを深めよう」を例に

（1）教材の位置づけ

光村の教科書では、「話す・聞く」学習は、「話すこと・聞くこと」の基本

（2）教材の活用と留意点

教材は、パネル・ディスカッションの

手順について、次のような項立てをして丁寧に説明しています。

- ① テーマを決める／② 意見をもち、根拠となる事柄を調べる／③ 係を決める／④ 係同士の打ち合わせを行う
- ⑤ パネル・ディスカッションを行う
- ⑥ 討論を振り返る（表現を簡略化）

さらに、各項目についての具体的な例や、パネル・ディスカッションの注意点を示しており、それらを参考にしながら計画すれば、形としてのパネル・ディスカッションを展開することはできるで

しょう。

しかし、授業の成否は討論の質にかかっています。その鍵となるのは、話し合いのテーマに対する討論参加者全員の意識水準と保有情報量です。とりわけ各パネラーが、自身の意見について、どれだけ説得力のある根拠や理由を提示できるかが重要です。その準備については、教師もしっかりかわる必要があります。

どのようなテーマを設定するかということも、討論を深める上で重要です。教科書には、「言葉の使い方」に関するテーマが四例示されていますから、その中から選んだり、生徒や学校、地域に存在す

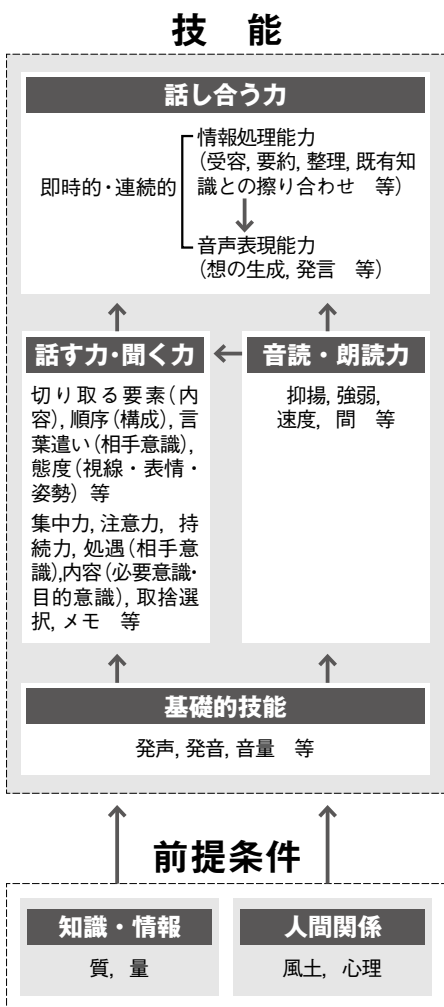
る問題、時事問題など広い範囲から、生徒が強い興味・関心を示す問題を選んだりすればよいでしょう。

⑥の「討論を振り返る」ステップも極めて重要です。一人一人の討論参加者が、このパネル・ディスカッションを通して、取り上げたテーマに対してどれだけ考えを深めることができたのか、その結果がこの授業の評価といってよいでしょう。

3 おわりに

教科書には、巻末に「話し合う手だて 討論と会議」という資料があり、「バズ・セッション」「シンポジウム」「ディベート」等についての説明がされています。本教材と関連して取り上げ、さまざまな話し合いの形態について理解を深めさせることも効果的です。

また、教科書には文字教材という制約がありますから、音声言語関連の学習では、音声や映像等の教材についても、適当なものがあれば積極的に活用する姿勢が必要です。可能なら、教材を自作するということにも挑戦してみたいかが良いでしょう。



身の回りの文字を見つめ直してみよう

看板文字の息づかい

二松學舎大学 非常勤講師 内田 征志（うちだ せいし）

はじめに

現代では、ワープロソフト等の普及により、文書作成時には、さまざまな書体（※①）や文字修飾（※②）を用いて表現することが容易になった。しかし、自由度が高すぎて、かえって内容や意図が伝わりにくい表現になってしまいうこともあり、その選択を適切にするための指導も必要となっている。

平成二十年三月告示の新しい中学校学習指導要領「国語」でも、第三学年で「身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」が新たに加えられた。生徒一人ひとりが、自ら「文字」に興味・関心をもち、理解を深めるための指導は、ますます重要になってきているといえよう。

指導の流れ

①文字にはいろいろな書体があることに気づく

初めに、光村図書「中学書写 二・三年」教科書の見返し（2ページ）「文字は何に書かれてきたのか」を見ながら、同じ「馬」という文字でもさまざまな書体があることに気づかせる。

この教材は、書かれた素材についての解説が中心となっているが、本実践では「馬」の書体の違いに着目させた。もちろん、中学校の書写では学習する内容で



さまざまな「馬」の書体

はないが、後に集めた文字を比較・分類するときの目安として軽く触れるようにした。

各書体の特徴がより分かりやすいように、「甲骨文字」「金文」「篆書」「隷書」「草



商店街にはさまざまな書体の文字があふれている

②身の回りにある文字を集める

校内、家庭内、街中などで見かけたさまざまな文字をデジタルカメラで撮影する。その際、文字のもつ表情や効果について生徒に興味や関心をより高くもたせるよう、今回は、「毛筆風書体」（それに近い活字書体も含める）というテーマを決めて文字収集をさせた。こうした制約を設けることによって、より意識的に文字に向き合うことができる。

また、デジタルカメラを使わず、紙に鉛筆でメモするという方法も考えられる。今回は、「骨書き（※③）」「籠字（※④）」という方法も合わせて取り入れた。この方法は記録に時間がかかるが、きちんと一字一字の字形を確認することができ、生徒たちは、お互いに書き取った字形を比べながら、楽しんで取り組んでいた。

③集めた文字を分類する

班ごとに、収集してきた文字の書体分類を行う。基本的には①で学習した書体に基づいて分類するが、仮名文字やデザイン書体なども混じっているため、「その他」「仮名」などのカテゴリーも必要に応じて設ける。

ここでは厳密な分類は目的ではないので、似ている書体でのグループ分けと考へ、あえて生徒の判断に異論を差し挟むことはしない。

④それぞれの書体がどんな意図や効果があるか考える

まとめ方としては、光村図書「中学書写 二・三年」教科書の「四 生活にかそう」で扱われている「修学旅行新聞」（P.29）などを参考に、新聞形式、パネル発表など考えられよう。今回は、時間の都合上、班ごとに自由な方法で発表をする形式をとった。

本実践の目的は、書体の分類を知ることではなく、多様な書体があり、それぞれの書体が使われている理由を理解することにある。書体ごとの特徴や与える印象について調べ、それを今後の文書作成などで生かせるような指導をしたい。

指導の実際

それぞれの班で、集めた文字と、それについての感想を発表させた。そのうち、特徴的な例を二例紹介する。(生徒作品のデジタルカメラ画像は、商標権に抵触するおそれがあるため、一部改変して掲載)

A班 同じ文字で異なる書体を集める

「鮮魚」…流れるような書き方、わざと太さを変えた書き方、勢いのよいはねなどで、魚の生きの良さを表している。

「珈琲」…漢字で表し、書き文字にする、特別な感じがする。

「そば」…仮名にはいろいろな書体があり、それぞれのそばの太さや味が表れているようだ。

同じものを売っている店でも、看板の書体や文字の色が違うだけで印象が違ってくる。

学校の表札を魚屋さんや珈琲店と同じ書体で書いたら変だと思ふ。それぞれの商店や会社などは、そこにふさわしい書体を使っているんだなと思った。

この班では、同じ商品の書体による表し方の違いに目をつけている。生徒たちは、文字を集めながら、書体ごとに違う表情を的確にとらえ、さらに、ゴシック体や明朝体などの活字での表現との違いに気づくこともできていた。

B班 隷書に注目し、鉛筆によるメモをもとに特徴を考える

「隷書」を選んだのは、他の文字と違ってきれいで整った印象を受けたから。探しているうちに、結構いろいろなどころで使われていることに気がついた。

また、同じ隷書でも、太さや形が違っているものがあることもわかった。

隷書は、楷書や行書と比べて、なにか正式でものものしいイメージがある。また、はらいの部分が独特で、きりつとしたスピードが感じられる。格式を重んじるお店や商品などでよく使われているようだ。

B班では、看板等に使用されている隷書を中心に集めた。この実践の冒頭で、各書体についての大まかな解説はしたが、

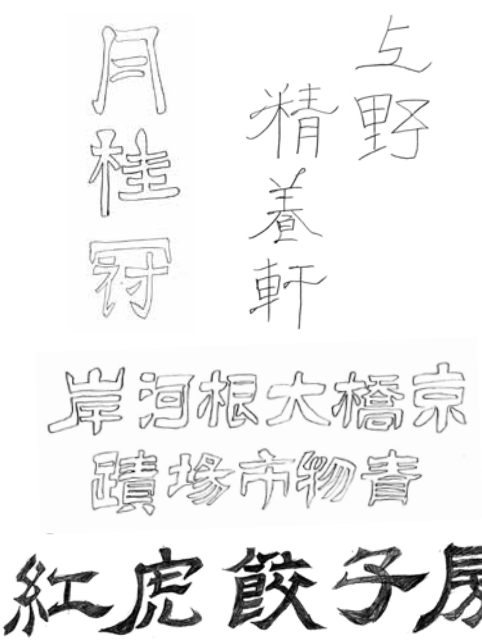
おわりに

本実践は単純に言えば、校内、家庭内、街の中など日常生活の中で普段見かけている看板文字を集めてみるという、ただそれだけのことであったが、「文字」に対しての生徒の意識は随分変わってきたように思える。身の回りの多様な文字に関心をもたせることは、書写指導の原点の一つであることは間違いないだろう。「文字と遊ぶ」という感覚で、一文字

A班の集めた文字群



B班の集めた文字群



隷書の特徴について細かな説明はしていなかった。そのため、収集した文字の中にはポップ文字などのデザイン活字も含まれていたが、あえて区別させる指導は避けた。

生徒はこれらの文字を模写するなかで、帰納的に隷書の特徴を探り出し、波磔(はたぐ)※⑤を強調した気品や、美しい姿を感じ取っていたようだ。

ここで取り上げた両班に限らず、生徒たちは実にさまざまな書体の文字を集めてきた。それを使って、自分たちが好きな書体、使ってみたい書体など考えさせることで、文字の形や効果に対する興味が高まってきた。生徒の中から自発的に、これらの書体を生かした作品作りをしたという声も出てきたことで、本実践の目的は、まず達成されたといえよう。

今回は時間の都合でできなかったが、ここで学んだ書体による効果を応用して、本の帯やポスター作りなど、人目を引きつける必要のある表現活動に結び付けられれば、さらに文字に対する意識は高まってくるであろう。

※①「書体」

楷書・行書・草書など、特定の様式で統一された字形。ワープロソフトなどで用いられる「フォント」とほぼ同じ意味。

※②「文字修飾」

太字や斜体、影付き、白抜き、縁取りなど、その文字を目立たせたり区別したりするために用いられる手法。

※③「骨書き」

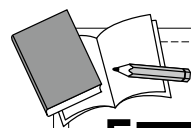
画の中心を線で示す方法。

※④「籠字」

文字の輪郭を写し取ること。

※⑤「波磔」

横画の終筆に見られる、隷書独特の三角状の払い。



赤木かん子の 「図書館を利用した “調べ学習”のしかた」>> 中級編

今回は、テーマの決めかたを、もう少し中学生らしくしていきましょう。

「初級編」は何も見ないでやる……つまり、「自分の知っている知識だけ！」を使ってテーマを決めるやりかたでした。これは小学校2年生からでもできる方法です。

厳密に言えば、このやりかたは正確だ、とはいえません。

が、たとえ中学生、高校生であっても、まず一回は初級編からやってください。

なぜかという、もう中学生なのだから中学生らしい方法でといって、いきなり中級編から始めてしまうと、理解できなくなってしまうからです。

初級編の「テーマの3点決め」は、物事を考えるときの基本です。まず、これが完全に自分のものになっていないと何もできません。

ただし、小学校2年生なら20分かかるところを中学生は3分で駆け抜けます。中学生は頭が働くようになっているからです。

でもその3分をやらないと、次にはいけないのです。

たった3分です。

ですから、必ず省略しないでやってください。

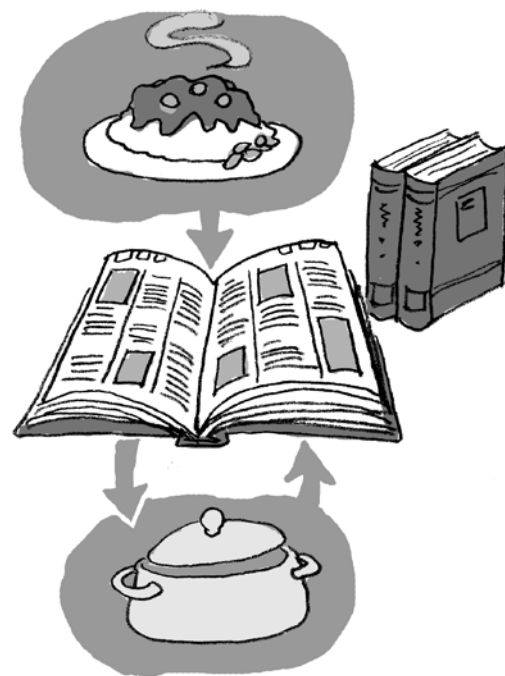
初級編が理解できたら、いよいよ「中級編」ですが、中級編は、**テーマ決めに百科事典を使います。**

まず一番目のキーワードを、たとえば「料理」と決めたら、まず、それを百科事典で引きます。

そして、その百科事典の記述の中から二番目のキーワードを決めます。

たとえば、「調味料（コショウ）」「調理器具（なべ）」「調理法（ゆでる）」など。

そして、それが決まったら、またその二番目のキーワードも百科事典で調べる…。



こうして、テーマに関する基礎知識をきちんと押さえます。

最後に、初級編と同様に“ミステリーカード”をつかってテーマを絞り込みます。



なぜ一番最初に百科事典を使うのかというと、百科事典には、まず初めにその言葉の定義が書いてあります。

たとえば“料理”を引くと、「食べられる食材を、食べられるように加工すること」と書いてあります。

この定義を知っているかどうか調べ学習の質を決めるのです。

さらに、自分の持っている知識に間違いがないかどうか確認し、自分が知らない知識を手に入れます。

調べ学習「中級編」は**“百科事典を二度引くことで、基礎知識をきちんとおさえる”**です。

ここまで理解できたら、次は、百科事典+ほかの本を使ったテーマ決めに行きましょう。

一番目のキーワードを決めて百科事典で定義を押さえた後、次に、そのキーワードを、ほかの本（つまりは専門書ですね。たとえば料理なら、ここでようやく図書館の料理の棚に行くのです）や、インターネットで情報収集をします。

定義を押さえているから、専門書を読んでも理解しやすくなっているのです。

しかし、インターネットの情報を自分の発表に使うわけにはいきませんから、インターネットは、このテーマに関してなにか面白いネタはないかなあ、ということを探すために使います。

そうやって情報を集めてから、二番目のキーワードを決め、そのキーワードについても情報を集めるわけですから、うん、これでいける！ とテーマが確定したときにはたっぷり情報が集まり、結論も出ていて、あとは書くだけ！ になっているはずなのです。

では次回は、「そうやって情報は集めた。あとはそれをどうやって書くか」の、レポートの書き方にいきましょう。

大好評
絶賛
発売中!

光村

国語デジタル教科書 中学校版



もっと、国語が好きになる。

光村「国語デジタル教科書」は、教科書をそのまま拡大することで、全員で同じ画面に注目しながら学習できる指導用ソフトウェアです。みんなで文章について意見交換をしたり、動画を見てなるほど! と思ったり。教科書を立体的に活用することで、確実に国語の力が向上します。

(本ソフトウェアの使用にあたっては、プロジェクタ等の拡大提示装置が必要となります。)

「話す・聞く」編 (1～3年収録)

学校フリーライセンス
税込 52,500円(本体50,000円)

古典編 (1～3年収録)

学校フリーライセンス
税込 52,500円(本体50,000円)

※「学校フリーライセンス」とは、校内でご利用になるパソコンの台数を制限しない契約です。

実践活用ガイド

ができました!

「国語デジタル教科書」を活用した実践事例をご紹介します。
体験版と併せてただいま無料配布中! 詳しくは下記ホームページまで!

光村図書出版株式会社
www.mitsumura-tosho.co.jp

〒141-8675 東京都品川区上大崎2-19-9
TEL.03-3493-5741(デジタル教科書お客様窓口) FAX.03-3493-5483
E-mail: digital-info@mitsumura-tosho.co.jp

教科書編集部便り

日常に生きる言葉を!

新版教科書の編集を始めたころ、監修者の樺島忠夫先生・宮地裕先生・渡辺実先生が共通しておっしゃったのが、『『豊かな語彙』といったとき、量的な豊かさだけでなく、質的な豊かさを求めなければならない』ということでした。

テレビを見ていると、おいしくても、怖くても、楽しくても「ヤバイ」という感想をよく耳にします。電車で中高生の会話が聞こえてくると、そこにはたいてい「ヤバイ」が入っています。「ヤバイ」と言っておけば、具体的な感想を考えなくていいし、友達と意見の相違がないから楽なのかもしれません。しかし、「ヤバイ」ですましていると、自分の感情の機微に気づけなくなるのではないかと心配になります。本当に伝えたい気持ちが、友達や親に伝わっていないのではないかと。

また、連日のように報じられる悲惨な事件を見ていると、言葉で気持ちを伝えられなかったり、うまくコミュニケーションがとれなかったりして、凶行に及んでしまったと見受けられる事件が少なくありません。たとえいろいろな言葉を知っていても、それが偏っていたり、誰かの受け売りだったり、一方的だったりすると、相手に届かず、結局、意思疎通が図れないのではないかと感じることもあります。

生徒には、ぜひ、たくさんの言葉にふれてほしいと思います。そして、それを自分の言葉として、相手に届くように使えるようになってほしいと思います。教科書がそのきっかけになるよう、新版の編集では、言葉の学習に終わることのない、日常に生きる教材作りに尽力しました。どうぞ、ご期待ください。

平成23年度「言語教育振興財団」研究助成金 一般公募

言語教育(国語教育・外国語教育等)の充実・発展を図るために、理論と実践の分野について優れた研究開発を行う団体または個人に対して助成します。

助成内容	①言語教育の内容・方法に関するもの(教育内容・方法部門) ②言語教育教材の質的向上に関するもの(教材部門) ③教育機器を利用した言語教育の在り方に関するもの(教育機器部門)
研究期間	平成23年4月～24年3月(原則1年間)
応募資格	言語教育(国語、英語、日本語等)に関して研究開発を行う教員及び教育開発を行う小・中・高等学校・大学・教育研究団体(学校の学年・教科単位も含む)
助成件数及び金額	助成件数は80件まで。助成金額は1件につき20万～50万円
応募方法・締め切り	・所定の申請用紙に記入の上、研究開発活動についての企画書または実施した実践報告書等の参考書類を添えて、平成22年12月22日(水)必着で、当財団事務局に郵送。 ・申請用紙を希望される方は、直接又は返信用封筒を同封の上、当財団事務局までお申し込みください。 ・この応募要項については、都道府県教育委員会等推薦の場合も同様に扱います。
決定・発表	当財団「選考委員会」にて選考を行い、選考結果を平成23年2月末までに通知。 平成23年3月末に銀行振り込みで交付します。
問い合わせ先	財団法人「言語教育振興財団」事務局 〒141-0021 東京都品川区上大崎2-19-9 TEL 03-3493-7340 FAX 03-3493-2174